生きる力を育む
芸術文化

～ワクワク、ドキドキの芸術文化を目指して～

－ 概要版 －

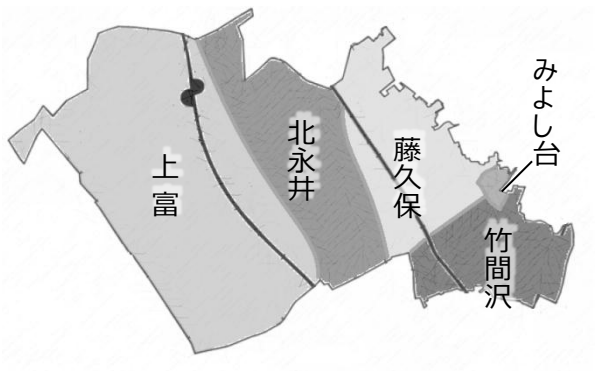
三芳町芸術文化懇談会
政策研究所「芸術文化」プロジェクトチーム

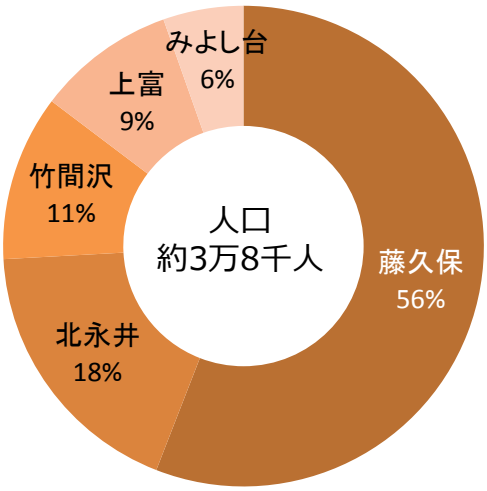
2015.3.28

芸術文化薫る豊かな町となるには・・・

三芳町にはお囃子などの伝統芸能が脈々と受け継がれている。また、公民館などを中心に様々なサークルや団体が活発に芸術文化活動を行い、文化会館や公民館などで住民と共に芸術文化活動を推進している。そんな中、住民が中心となる芸術文化薫る豊かな町となるにはどのようなことが必要なのか・・・。
平成25年から２か年にわたり、住民を中心とした芸術文化懇談会と職員からなる政策研究所「芸術文化」プロジェクトチーム（ＰＴ）において検討してきた結果を、提言書としてまとめた。

三芳町について





上富地区：最も広い面積を占め、半分以上が農地と平地林。

北永井地区：上富地区に次いで、武蔵野の景観が残されている。

竹間沢地区：東側に工場地域が形成、北側は住居と工場が混在している。

藤久保地区：町の人口の半分が居住している。公共施設の整備が進んでいる。

みよし台地区：大規模集合住宅が大半を占め、最も人口密度が高い。

昼間人口：約4万3800人
昼間人口比：113.08%

児童生徒数：約3400人

高齢者人口：約8200人
高齢化率：20.9%

世帯数：約1万5500世帯

これまでの町の芸術文化活動Ⅰ

郷土伝統芸能

町に伝わる伝統芸能

●お囃子（竹間沢・藤久保・北永井・上富）
竹間沢・藤久保・上富地区では江戸後期に伝えられたとされている、旧来のゆったりしたテンポの「古囃子」。北永井地区には幕末から明治にかけ各地で盛んに創作された速いテンポの「新囃子」。すべて町の無形文化財に指定され、各地区の保存会で現在も地元の祭礼等に参加し、活動を進めている。また、郷土芸能保存会において交流を深め、後継者育成についても各地区で、農家青年を中心に地道に進められている。

●里神楽と車人形（竹間沢）
竹間沢の前田家は里神楽の家元を務める家系で、少なくとも百数十年に遡って行なわれ、祭礼の際に近郊の村々はもちろんのこと、東京の多摩地方まで舞を奉納し、また踊りや囃子の指導も行っていた。現在でも近隣の神社で舞を奉納し、舞台公演も行うほか、小学校の授業で保存会が協力をして体験教室、毎年行われる車人形公演に向けて、一般の参加者を保存会が募集し、実際に人形の操り手で出演などを行い、後継者の育成も行っている。

地域の芸術文化活動

●文化協会
毎年、町民文化祭を中心となって開催している。その他、文化協会まつりなどを主催。所属団体数は4連盟7団体、総勢529名（平成25年5月現在）。

■公民館での活動
町民と共に取り組むスタイルが模索され、「名作映画とサロンコンサートの夕べ」や「竹間沢マンスリースクゥエアー」が生まれ、地域の芸術文化鑑賞事業が継続して取り組まれるようになった。

■後継者の育成
近年、小学校の授業で保存会が協力をして体験教室を行ったり、毎年行われる車人形公演（教育委員会、コピスみよし共催）に向けて、一般の参加者を保存会が募集し、実際に人形の操り手で出演などを行っている。

子どもの芸術文化活動

●小学校
鼓笛隊活動／町内の6年生全員が行う。鼓笛隊発表に向けては、音楽の時間のみならず休み時間や放課後、総合的な学習の時間を活用して熱心に取り組んでいる。

●中学校
吹奏楽部／コンクール出場や各種演奏会などを開催している。外部との交流にも積極的で、老人ホームや幼稚園への出張演奏や、3校合同での演奏会なども行っている。
校内合唱祭（合唱コンクール）／各クラスごとに団結して目標達成に向けて励んでいる。

●保育所・幼稚園
お絵かき、泥だんご作り、色水あそび、わらべ歌、季節や行事のうたなど生活や遊びの中での活動をはじめ、お店屋さんごっこの品物作りやおひな様作りなど行事に向けての制作や、年1回開催されるお遊戯会での、歌、踊り、合奏、劇ごっこ等の発表など、年齢や発達に応じた取組みを行っている。また、町内私立幼稚園においても、保育所同様、芸術文化活動に取り組んでいる。

●その他
児童館でのクラブ活動や鑑賞、体験活動のほか、地域のキッズダンスサークルによるダンスなど、習い事としての芸術文化活動もみられる。

文化会館

平成14年に芸術文化活動の拠点（劇場）としてコピスみよしが開館した。これは、町においてハード・ソフト面を合わせた総合的な芸術文化活動のスタートであった。「三芳町文化会館運営基本方針」では、その役割を「町民のための文化・芸術活動の場」とし、

①**【発表】** 地域の文化・芸術活動の発表の場
②**【鑑賞】** 多様な要求に応える文化・芸術のふれあいと鑑賞の場
③**【参加】** 町民自らが多様な形で参加し、育ち合う文化・芸術活動の創造と交流の場

と定めている。

■アウトリーチ事業

文化会館が住民との新たな接点を求めて、住民の活動の場に自ら入り込んでいき、芸術への関心を飛躍的に伸ばそうという取組みである。また、3つの目的を複合的に絡めた取組みでもある。
議場や病院、商業施設でのロビーコンサートもそのひとつであるほか、小学5年生を対象とし、手の届く距離で行われる小学校アウトリーチ事業、中学1年生を対象とし、実際のコンサートさながらの空間（コピスみよしホール）で実施する芸術鑑賞会がある。

文化会館コピスみよしは、文化施設設立の本来の目的である「地域の芸術文化活動の振興を図る」ことを改めて認識し、**地域に根付いた創造的かつ独自的な芸術文化事業**を町と指定管理者が協力して推し進めている。

平成25年９月28日、ウニクス三芳で行われたロビーコンサートの様子

芸術文化は生きる力を育むこと

子どもたちをめぐる社会状況はなかなか改善されず、
子どもたちがいきいきと育っていくために、
芸術文化活動の推進も多くの役割を担うはずである。
芸術文化活動によって心の豊かさや、くらしに潤いが生まれることで、
人間関係や地域社会の関係が維持され、そのことはまちづくりにも大いに役立っていくと考えられる。

芸術文化懇談会・芸術文化プロジェクトチームの活動

三芳町の限られた財源・資源の中で、地域特性を生かした文化や芸術をいかに創造・展開していけるかを研究目的とし、平成25年、学識経験者と住民を中心とする11名で構成された芸術文化懇談会、及び政策研究所の研究テーマのひとつとして、９名の職員で構成された芸術文化PTが立ち上げられた。
２か年の懇談会とPTの会議だけでも、開催延べ回数は30回を優に、調査・研究・討議に加え、様々な活動を行ってきた。

視察・体験

現在町で行われている芸術文化事業（アウトリーチやロビーコンサート等）の視察を実施。

学習会

東京大学社会人文研究科准教授の小林真理氏をお迎えした勉強会の開催。

ローカル・カフェ

お茶やお菓子をつまみながらの異世代間意見交換の場となったローカルカフェを開催。

３本の柱

今後、芸術文化活動を推進し、
生きる力を育む芸術文化活動のために
必要となることは何か。

地域と住民、事業目的との関連を意識する

芸術文化活動そのものの役割と共に、芸術文化活動により、人間関係や地域社会の関係の維持・形成が期待される。
住民にとって、いきいきと生きる未来を作り上げるためのポイントは、
①パートナーシップ
②プラットフォーム
③発表の「場」と「機会」の共有
④情報の拠点づくり
⑤芸術文化コーディネーター組織の設置
の５つ。特に、⑤は住民を中心とした合議制の組織として、個々で乗り越えることが困難な様々な課題を克服していくことが求められる。

ワクワク・ドキドキ －期待感－を大切にする

作り手と参加者が
ワクワク感・ドキドキ感を共有すること
＝　達成感

ワクワク・ドキドキは芸術文化活動の盛り上がりのために必要不可欠。
日常得られない感動や
人生の中で忘れる事ができないもの、
思い出した時に語り継がれるものとなる
活動が必要。

ワクワク・ドキドキを感じてもらう環境を
積極的に作っていかなければならない。

公共性、独自性

芸術文化は思いもよらない内容に変化し、新たな分野や別の領域と融合しながら活動を広げていく可能性を秘めている。創造の自由を保障し、芸術文化活動に公共性をうまく含ませ、共有の活動へと進めていくことが求められる。
そのポイントとして、
①様々な独創性のある活動
②公共性を確保した町の支援
の２つが挙げられる。
地道な意見の蓄積と研究討議を継続させ、公共財[i]としての芸術文化として認知されることが望まれる。

i 公共財　…　各個人が協働で消費し、対価を支払わない人を排除できず、ある人の消費によって他の人の消費が妨げられない財・サービス。通常、国など公共部門によって提供される公園・一般道路・消防・警察など。（『デジタル大辞泉』小学館）

まとめに代えて

芸術文化活動の役割の一つは、
芸術文化活動そのもの（ワクワク・ドキドキ感、癒し、励まし等）が有するもの。
二つ目は、人間関係や地域社会の関係（コミュニティ）の維持、形成であると考えられる。
三芳町においては、各行政区や学校区毎のきめ細かい取組みやつながり、
みよしまつりや町民体育祭・文化祭などの全町民対象の取組みが行われていることなどをみても、
コミュニティの維持・形成は町ぐるみでも進行している。
しかし、日本各地で、地域コミュニティ維持の危機が叫ばれる今日、
体育祭などの参加者の減少や、行政区・自治会等への加入の現状などに見られるように、
三芳町にも徐々に危機は訪れている。

芸術文化活動だけでなく、スポーツ・レクリエーション活動などを含めた文化活動は、
そのものの価値に留まらず、人間らしく生きていく力を秘めた人間固有の活動である。
人と人とが触れ合い、関係し合い、認め合い、育ち合い、豊かな社会を形成することを、
少しずつ、着実に進めることが求められているはずである。
憎しみや戦いが続く世界で、文化活動は人類史と共に淡々と、そして脈々と進み、
私たち人類の共通の財産となってきた。このことを私たちは忘れてはならない。

十分とは言えないまでも、芸術文化活動への提言書を町に提出することで、
今後も継続して町が芸術文化活動を推進していくことが、三芳町に関わるすべての人々の
未来への展望を示していくことに他ならない。
時代や世代が変わろうとも、芸術文化活動の推進をまちづくりの根幹の一つに据え続け、
住民を主体として様々な施策を展開することを止めてはならない。
そのために必要なもののひとつとして、条例等の制定が挙げられる。
これについては決してあせらずに、住民が主人公となりながら、
これまで、そしてこれからの芸術文化の活動を検証しながら作り上げることが肝要であることを記しておく。